

### 1. 共同研究について

共同研究については、2022年9月10日(土)、関東学院大学金沢文庫キャンパスにて行われた関東都市学会9月例会にて、研究報告を、共同研究者の鶴岡・真殿(以上オフライン)、岩井・板橋・栗原(以上オンライン)と共に行った。プレゼン後、活潑な質疑応答が行われ、研究に対して大きな示唆を得ることとなった。

### 2. 共同研究で用いた手法について

共同研究中、個人の修士研究の中で、「求人票の文章をテキストマイニングし、地域の産業の状況を可視化する」手法を提案した。この手法を、愛知県豊橋市について用いた結果を、2023年2月20日、愛知県東三河総局主催の「大都市企業×東三河企業マッチングトークセッション」にて公開し、提案を行った。

### 3. 個人研究について

#### ■課題意識

個人研究としては、「地方郊外ロードサイド型風景の再評価」をテーマに活動を行った。地方郊外ロードサイド風景については、「新種の郊外は、風景の古層(土地の精霊)を無視、破壊、断絶、均質化する(安西,2010,p109)”(松井利夫・上村博「芸術環境を育てるために」より引用)と、否定的な文脈で語られることが多い。

そして、共同研究における調査対象地域である太田市においても、昨年までの調査の結果、『歴史・伝統・観光資源』についての市民の関心が薄い調査結果があり、その理由として、「・観光資源がない ・学ぶ機会が無い ・製造業の流入労働者が多い ・発信力が無い」の、いずれかを理由として考えている傾向があることが判明した。

このことから、日常的に目にする風景に、積極的な高評価が与えられていないため、地域に文化資産がないと思ってしまう市民の意識があるのではないかと考えた。LIFLE総研刊行の「“遊び”からの地方創生寛容と幸福の地方論Part2」(2022)においては、100万人以上の都市住民と、1万人以下の農村部の住民が幸福度が高く、5万～20万人の都市住民の幸福度が低い、人口に応じたJ型で幸福度が異なることが報告されているが、まさに、この5万～20万人が郊外都市に当たる人口規模である。

一方で、昨年までの市民のインタビューにより、太田市市民は太田市への愛憎入り交じる愛着を抱えており、その愛着は幼少期の個人的体験に基づくものであることが分かった。逆に、学校の地域史などの授業で教えられるような文化資産については、個人的な体験には基づいたものでないため、大人になってもその意識を持ち続けることが難しいことが分かった。

そこで、「幼少期の地域での個人的な日常体験」を積極的に評価することが、市民の地元への誇りを高めることに繋がるのではないかと考えた。そして、特に、個人的な日常体験は、太田市でよく見られるロードサイド型の郊外風景を再評価することを試みることにした。

#### ■郊外型のライフスタイルを評価する試み

このような視点は、谷頭和希の「ドンキにはなぜペンギンがいるのか」においても、「ファストフードの提供する食文化が均質な物だとはいえ、そこで同じ時間を過ごした友人達や家族との思い出は、それぞれの人に固有の物でしょう(中略)だからこそ「ファストフードが生活を均質にする」という言葉に完全にうなずけない私がいる”(谷頭,2022,p10)と、疑問が呈されており、一般性を持つテーマであるとも考える。

研究の端緒として、太田市出身の吉江淳氏にインタビューを行った、インタビューにおいて「人工と自然の入り交じった風景にふるさと感じ、地元を提示したい」「地域に「愛着」はないが、地域のことを「撮らなければいけない」「この風景を残さなければいけない」という気持ち」という吉江氏の動機を語っていただいた。

そして、「大きな自然でもないし都会でもない、中途半端な景色がこのまちっぽい」という吉江氏の地元感は、多くの都会でもないが際立った自然が残るわけではない郊外都市において、大きな示唆を与える物と考える。

#### ■提案と活動

上記より、2つの提案を行い、次年度以降の活動と指定

##### 1: 地域の何気ない日常風景を写真作品として提示する活動

吉江氏の手法に従い、三脚で高さを固定し、ピントをパンフォーカスに合わせた郊外風景の写真を連作で撮り、InstagramやTwitter上で公開する。高さは120センチメートル、すなわち小学生の目の高さとし、幼少期に見ていた風景の様子に近い状況を再現し、作品化する

##### 2: 地域の何気ない日常を言語として表現し、再評価を試みる活動

地域の日常の暮らし、地域への愛着に繋がる体験を言語化することで、地域への誇りを高める活動を行う。

具体的には、小学校高学年～中高生を対象とし、「地域史などの授業で行われるような受け継がれてきた定番の文化資産」でなく、実際に自分たちがよく行く「ショッピングモール」「塾」「ゲームセンター」「ファーストフード店」など、2500年【500年後】の博物館学芸員になったつもりで解説文を書いたり資料を収集する。

例えば、『ドンキホーテ』を「21世紀初頭の民衆商業施設」として、解説文を書いたり写真を取得する、その際、地域の美術博物館の学芸員に協力をいただき、解説文の書き方の指導も受ける。それらを「2500年の博物館～21世紀の日常の暮らし展～」として、実際に展示会を行う。

想定される教育上の効果として、自分たちの生活を客観的に再評価する技能が身につくと共に、日常の生活や日常の風景に対して価値を見出し、地域への自尊心が醸成されることを狙う

#### ■次年度以降の活動

次年度以降の活動としては以下の内容を行いたい

- ・テキストマイニング手法の学会発表、もしくは論文投稿
- ・上記提案1、提案2の具現化

以上をもって報告とする。